

## 五、マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか（視座を変える）

### ルカによる福音書第一章四六—五五節

スイッチをひねってクラシック専門のラジオ放送に合わせると、この世のものと思えないような音楽が流れてくる。それは硬化した私たちの外面の殻を突き抜け、内面の核心に触れ、私たちの中に反応を引き起こす。歌詞を理解することはできない——それがラテン語であることはわかる——けれど旋律と楽器と歌声が見事に霊的なものを伝えていることは疑いもない。

音楽が終り、アナウンサーが、ただ今お聞き頂いたのは、ディラッスス（私が一番最近聞いたのは彼の作品である）による『マグニフィカート』でしたとか、フレスコバルディ、ヴィヴァルディ、バレストリーナ、モーツァルト、ベルリオーズ、ピンカム、あるいは幸運な場合には、ヨハン・ゼバスチャン・バッハによる『マグニフィカート』でしたとか言うのである。聖書の記事

の中で「マグニフィカート（マリヤの歌）」よりも頻繁に音楽に用いられた箇所はない。

私たちはこれほどまで音楽的関心と呼んできた聖句についてあまりよく知ってはいない。教会で一年に一度、アドベント期間中にその記事を耳にするが、その時は受胎告知物語と組み合わせられている。私たちの脳裏に焼き付いている絵は、天使の出現に圧倒されて、おとなしく神に従っている農民の娘の姿である。「わたしは主のはしのためです。お言葉とおりこの身に成りますように」（ルカ一・三八）と彼女は答える。うっとりさせられる場面である。

しかしその従順な農民の娘が少し後で歌っている歌、すなわち私たちが『マグニフィカート』と呼んでいる音楽的な祈りには、うっとりさせられるようなものは何もない。なぜならばその最初の一節からしても、「わたしの魂は主をあがめる」という言葉で始まるからである。

この記事について学ぶことは、私たちがいかに取捨選択しながら話を聞いており、そして聞きたくないことはいかに要領よく聞き流しているかの際立った実例を提供してくれるであろう。

#### 聖書のテキスト ルカによる福音書第一章四六―五五節

「わたしの魂は主をあがめ、

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

わたしの霊は救主なる神をたたえます。

この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。

今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、  
力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。

そのみ名はきよく、

そのあわれみは、代々限りなく

主をかしこみ恐れる者に及びます。

主はみ腕をもって力をふるい、

心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、

権力ある者を王座から引きおろし、

卑しい者を引き上げ、

飢えてゐる者を良いもので飽かせ、

富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。

主は、あわれみをお忘れにならず、

その僕<sup>しもべ</sup>イスラエルを助けてくださいました、

わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とをとしえにあわれむと約束なさったとおりに」。

ルカ福音書の最初の二章には、イエスの誕生と幼児期についての最も豊富な記事がある。それらは記録であるというよりも、むしろ解説であり、私たちはそれらをクリスマス・ページエントの物語として読んでいる。子供たちがガウンを着て、丘の上に立っている羊飼から馬小屋の中で幼な子イエスを囲んでひざまずいている羊飼までを演じ、頭上では輝く七五ワット電球が神の臨在を伝えている。すべてが穏やかなハーモニーに包まれている。

しかしながらそのハーモニーに不協和音が入ってくる。私たちはそれを「マリヤの歌」と呼んでいるが、現在のような形で彼女が歌ったかどうかについては当然にも疑問がある。実際、いくつかの写本はこの歌を彼女の従姉妹エリサベツによるものとしているし、すべての写本はハンナという名前の別のもう一人の母親によるもつと以前の歌と酷似していることを示している。しかしこれについては後で戻ることしよう。現代のある注解書は、現在のテキストにはあまりにも多く編集者の手加えられており、「深い感情と強い確信が表現されている」ことを認めるもの、「独創性や想像性のほとんどないぎこちない詩」になっていると結論つけている。後の

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

方はともかく、最初の方の論評は間違いない。

この歌は私たちにとって少なくとも二つの理由から重要である。(一) この歌にはユダヤ教的伝統を帯びた諸テーマが反復されており、ルカはそれらを含めないでは、ユダヤ人の幼な子の誕生について正当な評価を下すことができなかった。(二) それらのテーマの重要性が物語の中で中心的役割を果たしているイエスの母の口から語られることによって強調されているということである。

マリヤはナザレの下層階級の労働者の娘であり、田舎の大工と婚約していた。彼女は朝もやの中で不可解な幻を見る。一人の天使が現れ、当然にも彼女はびっくりして正気を失ってしまう。なぜならば聖書的伝統において天使とは神からの使者だからである。神の使者が彼女のような者をどうしようというのか。しかしながら天使の出現よりもさらにもっと不可解なことは、天使の使信であった。マリヤに子供が生まれるというのである。マリヤの証言によれば、彼女はヨセフとも他の誰ともまだ寝たことがなかった。どうしてこんなことが起こり得るのか、彼女はとても不思議でならなかった。許嫁に何と言おうかという大きなジレンマもあった。マリヤにとって不思議であるなら、ヨセフが当惑するさまは誰にも想像することができよう。彼の当惑ぶりについては、中世に奇跡劇が演じられた頃に、幕間に行なわれる息抜き喜劇の題材にもなっていたほど

である。

いずれにしても他に選択する道のないマリヤは、自分の体内でちょうど九ヶ月先に救いの希望が成就するという天使の言葉を受け入れることになる。彼女、の息子、すなわち無名の人物の息子が「いと高き者の子」となり、その「支配は限りなく続く」であろうというのである（ルカ一・三三―三三三）。全くの驚きである。

マリヤはまだ何が何だか分からない状態であつたが、年上の従姉妹であるエリサベツを訪ねて山里へ行く。彼女も全く予期しない身重の身になって六ヶ月がたつていた。マリヤが歌を歌つたのはこの訪問の時である。歌は二つの部分に分かれていて、神が彼女になそうとしておられることについての喜び（ルカ一・五〇―五五）と、イスラエルになそうとしておられることについての喜び（ルカ一・五〇―五五）になっている。本書に掲載したテキストでは、この二つの部分の間に一行開けてあるが、共通した主題が流れている。すなわち卑しい者が引き上げられ、高ぶる者が追ひ散らされるということである。そしてすべては神のみわざなのである。

この歌は極めて政治的である。この事実が長く隠蔽されてきた。しかし第三世界の姉妹や兄弟たちがこの歌に自分たちの生の中心的位置を与えてきたことも事実である。それゆえに私たちに問われていることは、「私たちは自分たちの伝統となつて心心地よさそうにおとなしくしてい

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

るマリヤ像を乗り越えて、彼らの伝統となっている苦悩に満ちた戦闘的マリヤ像に移行してゆくことができるだろうか、ということである。

まず最初に不思議に思うことは、祈りの中に政治的見解があるという点であろう。政治と歌ならば私たちにも理解できる。事実、一九六〇年代の大きな政治課題はフォーク歌手たちによって訴えられた。そして現代のすべての革命においては、音楽家たちが大衆の希望を明確に表現しているように見える。独裁者はこのことを知っている。ピノチエト將軍と合衆国に支持された彼の臨時政府が、第二章で述べたようにチリのクーデターで権力を掌握した時、彼らはヴィクトール・ハラの手を切り落とした。彼が弾くギターが貧しい人々や抑圧された人々の希望を引き起こす触媒となっていたからである。

政治と歌ならば分かる。しかし政治と祈りはどうかであろうか。それは、「宗教的」活動はこっちで、「政治的」活動はあっちというように、生活の領域を区別しておきたいとする私たちの願望に反している。マリヤの歌はそのような区別をいっさい取り払っている。それはちょうどマリヤの腕に抱かれている幼な子がのちにヘロデやカイザルに立ち向かい、安息日に麦の穂を摘んだり病人を癒したりして「世俗的な」ことをなし、政治的秩序に脅威を与えるものとして捕えられ殺されていったことに共通する。(マリヤの歌と同じように) 神に向かって祈りを始め、(マリヤ

の歌と同じように）神の御名によって祈りを閉じることが、（途中の数節が示しているように）祈りの中に数多くの政治的事柄が含まれることを意味している。

さてマリヤは、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」という賛美で始めている。なぜか。それは彼女の中で神はすべてを逆転しておられるからである。他の神が御子をこの世に送るのであるならば、きつと王族の中から母親を選び出したであろうし、少なくとも上流階級の中から選び出したことであろう。しかしマリヤが歌っているこの神はそうしなかった。この神は身をかがめて、「身分の低い、主のはしためをも」（ルカ一・四八、いくつかの翻訳は「はしため」の代わりに「奴隸」という言葉を用いており、いっそう鮮明に核心をついている）心にかけられた。この神は貧しい人や、抑圧されている人や、奴隸とされている人に特別な注意を払われる。あなた方は救主を探しているのか。宮廷の方に目を向けしないで、奴隸の方に目を向けなさい。首都のエルサレムに目を向けしないで、ナザレという僻地に目を向けなさい。「ナザレから、なんのよいものが出ようか」（ヨハネ一・四六）と人々は後にあざ笑ったが、全くこのような調子でナザレ出身者の言うことなど相手にされていなかったのである。

しかし神は人間的な価値評価の世話にはならない。神が引き上げられるのは農民の娘であり、価値なき人々である。それゆえに代々の人々は、彼女を幸いな女と呼ぶことになるのである（ル

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

カー・四八参照)。マリヤはほとんど信じられない気持ちであった。「力あるかた(神)が、わたしに大きな事をしてくださった」(ルカ一・四九)。この私とは、貧困階層出身のマリヤなんかであり、教育もなく、社交界入りのパーティーもなく、多国籍企業の重役でもなく、噂や陰口の対象にしかない。「(本当に聖霊によって身ごもったんだって。どうも怪しい話だ……)」人間である。もし神がこのような仕方でお働きになるとしたら、すべてが変わってくる。誰が重要かという評価にも待ったをかけなければならなくなってしまう。

私たちは個人的レベルでは、このようなことを受け入れることができる。最終的には、ヤスツレムスキーといった名前の人でもたまにはボストンのお偉方の中で成功することもあるし、有色であっても、マーティン・ルーサー・キングJr.のようにきわだった人の場合には、名誉をたたえられて国家の休日となったりするのである。

しかし、もしこれが社会的形態の描写をも意味していて、低い階層の人々が引き上げられ、現在高い階層にいる人々が引き降ろされるというのであれば、どうであろうか。まさにこのような不穏な見解を含んだ形で、マリヤの歌は、マリヤ自身のことについて歌うことから、「代々限りなく」(ルカ一・五〇)神をあがめるすべての人について歌うことへと展開してゆく。神の御腕が「力をふるい」(ルカ一・五一)、すべてを逆転される時にはどのようなことになるのであろう

か。

まず最初にマリヤは道備えをしている。

「主は……心の思いのおごり高ぶる者を追い散ら」す（ルカー・五一）。自分は成功したと思っている者、自分に信頼を置いている者、自信に満ちた自己像を抱くのに大成功をおさめた者たちは「追い散ら」され、再び元通りになる望みもなくなるであろうと言う。

それからマリヤ（もしくは福音書記者）は、卑しき者が引き上げられ、権力ある者が引き降ろされることを生き生きと対照的に描く。前者は経済的範疇であり、後者は政治的範疇であるが、そのどちらの範疇も互いにもう一方を包含する関係である。

次に政治的（および経済的）側面が対照的に描き出されている。

「主は……権力ある者を王座から引きおろし……」（ルカー・五一）。イスラエルはアッシリア、バビロニア、エジプト、マケドニア帝国の興亡を垣間見てきた。私たちも同じように、一九世紀の大英帝国、二〇世紀の第三帝国を見てきた。今日、アメリカ人はソ連が倒れることを期待し、ロシア人はアメリカの滅亡を期待している。政治的権力が安定することは決してなく、常に弱点を持っている。しかし人々は決して自分の国が「引きおろされる」とは思わない。それゆえにこそ、私たちは耳を傾けなければならない。多分、アメリカは倒れかけているからである。

「権力ある者」とは単に政治的な国家や帝国のことではなく、他国の人々の運命を経済的に左右する者のことでもある。どの工場を閉鎖しどの工場を続けるかという決定を下したり、ニカラグアの人々が何を望んでいるかに関わりなくニカラグアをつぶす決定を下したり、自分たちの企業は小さな競争相手が諦めるまで損してもよいから、価格競争をして別の会社をつぶせという命令を出したりする者のことである。

「主は……卑しい者を引き上げ……」（ルカ一・五二）。「卑しい者」とは権力なき人々のことを意味しており、マリヤは、被抑圧者や価値なき者や貧しき者が神によって高められると言っている。イスラエルはアッシリア、バビロニア、エジプト、マケドニアよりも長く存続した。労働者は工場閉鎖をする重役たちよりも長く生き続けるであろう。ニカラグアの農民は「北方からの巨人」に対して守られるであろうし、多国籍企業が立ち去った後には、小規模の企業が戻ってくることになるであろう。

経済的（および政治的）側面も対照的に描き出される。

「主は……飢えてゐる者を良いもので飽かせ……」（ルカ一・五三）。この主張が毎夜空腹のまま床についている人類家族の三分の二の人々にもたらす希望を想像してみるとよい。この希望が持っている政治的意味合いは明らかである。金持が貧しい人々に食べ物を施すのを待つという道

はとるべきでない。貧しい人々は事柄を自分たちの問題としてゆかなければならない。確かに、神は彼らの口を満たされるであろう。しかし同時に神は彼らが協力することを期待しておられる。出エジプトの時、神は約束の地への道程を人々に示すことはできた。しかし人々は自分たちでその道程を進まなければならなかった。同じように、ここでマリヤが取り扱っている飢えの問題においても、民衆は、貧しき者をさらに貧しくしている一方で富める者をますます豊かにしている政治経済体制に挑戦し、そして一部の人がすべての土地を所有するのではなく、むしろ、すべての人がいくらかの土地を所有できるように土地の再分配を要求してゆかなければならないであろう。地球は全人口を養うことができる。しかし、それは土地や分配や利益についての根本的に違った分配によってのみできることである。

「主は……富んで、いる者を空腹のまま帰らせなさい、です」(ルカー・五三)。もし神が「飢えて、いる者を良いもので飽かせ」られるとしたら、それは、マリヤが「富んで、いる者」という言葉を用いている「飢えていない人々」の取り分が減少することを意味している。マリヤの筋書きでは彼らの将来は暗い。富んで、いる人々に富を捨てての覚悟があるならば、おそらく生き延びることはできるであろう。これはまだ時間があるうちによく考えて選択すべきことである。

マリヤの一番最後の主張はあまりに奇妙であるため、私たちはほとんど気がつかない。「主は

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

……その僕イスラエルを助けてくださいました（ルカー・五四）。神が僕を助けるだって。きっとそれは逆で、僕が主人を助けるではないのか。しかし、マリヤは、「逆」であるはずのことが間違っていることを私たちに伝えている。何を必要とされない神は、すべてを必要としている人々を助けて下さる。すべては逆転するのである。そしてもし僕が「助けを必要とする」状態で身近にいるとすれば、僕はもはや僕ではなく、別の名の者である。すなわち友であり、仲間であり、同胞なのである。

マリヤは僕一般についてだけでなく、特に「僕イスラエル」について歌っている。そして物事を逆転させる主張がもしそこにあるとするならば、それは、イスラエルが神との特別な関係に立っているという主張である。もしマリヤが個人として名も無き人物であるとするならば、イスラエルも国家としてそれ以上に取るに足りない存在である。古代世界に目をやると、至るところに神の代理人のような国家を探すことができる。文化を持ったエジプト、コスモポリタンの性格を持ったローマ、哲学者と悲劇詩人のギリシャ、強力な兵隊を持ったバビロニア、それにアッシリア。しかしイスラエルはどうであったか。あの時代において神が世界を救う手段としてイスラエルを選んだことは、今日世界平和の希望をアンドラ国（訳者注——スペインとフランス国境、ピレネー山中にある人口一万六千の共和国）に託すようなものである。

第三世界の友人たちにとって、救いの出来事 the Messianic event (このことをマリヤの歌は指示している) は、ただ単に永遠的に価値あるものを霊的に再構成することではなく、純然たる政治的社会的逆転をすることである。エルサ・タメスが言うように、マリヤの歌は、「道徳的変化を遂げる個々人のことではなく、富める者と貧しき者、権力ある者と卑しき者が置かれている秩序の再構築」(*Bible of the Oppressed*, p. 68, 傍点は著者の加筆) のことを語っている。またグスタボ・グティエレスは、マリヤの歌の前半で神に愛されていることの喜びがいかに強調されているかに触れた後(ルカー・四七―四九参照)、その感謝と喜びが、「被抑圧者を解放し権力者を引き降ろす神のみわざと密接に連結している」ことを私たちに気づかせてくれる。希望に満ちた彼の結論は、「歴史の未来は貧しい人々や搾取されている人々のものである。真の解放は被抑圧者自身のわざであり、彼らを通して、主は歴史を救われる」ということである (*A Theology of Liberation*, p. 208)。マリヤの歌は革命的行動への呼びかけなのである。

### 考察と議論のための課題

ラテン・アメリカでは、マリヤの歌ほどに広範に用いられている聖書記事はほとんどない。本

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

章での聖書研究に照らすと、ラテン・アメリカのキリスト者は私たちよりも正しく御言葉を聞いており、そして私たちにできる最善のことは、彼らが聞きとっていることに耳を傾けようとするものであると思える。そこで本章の後半では、マリヤの歌を新しい仕方で私たちに示している三つのエピソードを簡単に記すことにしよう。

1 「ミサは終了いたしました」。

司祭がスペイン語でこう言うと、数千人の礼拝者は立ち上がって、集会場から出て行く準備を始めた。これらの人々はペルーのリマで「夏期講習」に参加していた。その講習会は、どうすれば神学や聖書やカトリックの信仰が、彼らが今から帰途につこうとしている村々を特徴づけている貧困や抑圧や不正義を克服するための手段になりうるのか、ということを知ろうとする人々のための講習会であった。集会場を出て行く時、彼らは歌い始めた。彼らが歌っていたのは何であつただろうか。マリヤの歌であつた。

妻と私はその場に居合わせていた。文化的には外来者であり、言葉の上でもいくぶん慣れではあったが、彼らが歌っていた言葉には聞き覚えがあつた。私たちは同じ聖書を共有しているからである。しかしあるレベルにおいては、それは全く新しい言葉であり、私たちのどちらも以前

には一度として聞いたことのない言葉であった。なぜならばその言葉は、貧しくそして抑圧されている人々の唇の上で、従順な乙女のつぶやきからやがて成就する広範な勝利の約束へと変化していったからである。

もはや神を正義と力の神と呼ぶことはできないのではないかと疑いをはさんでもおかしくない人々が、「主は、み腕をもつて力をふるい」と歌っていたのである。

貧しい人々を全く顧みない傲慢な支配者によって、あまりにもしばしば犠牲を強いられてきた人々が、「心の思いのおごり、高ぶるものを追ひ散らし」と歌っていたのである。

確固たる権力支配をしているように見える指導者によって脅迫されたり投獄されたりしてきた人々が、「主は、権力ある者を王座から引きおろし」と歌っていたのである。

自分たちの家庭が圧迫されて破壊され、再び立ち上がる望みすら見えないような人々が、「主は、卑しい者を引き上げ」と歌っていたのである。

自分や子供たちの食べ物で心配している人々が、「主は、飢えている者を、良いもので飽かせ」と歌っていたのである。

合法的にせよ非法的にせよ、金持からますます搾取されている人々が、「主は、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい」と歌っていたのである。

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

彼らはすべての待望が成就する新しい秩序と新しい世界のことを歌っていた。権力者はスパイや密告者を集会に送り込んでおり、勿論、外には軍隊を（警官隊に偽装させて）張り巡らせていた。警官隊は会衆が集会場から出てくる時、「権力ある者を王座から引きおろし」とか「卑しき者を引き上げ」といった革命的スローガンを聞いて発砲の構えをしたに違いない。

しかし会衆は鳩のような素直さと同様に蛇のような賢さを持っていた。警官隊も「善良なるカトリック信者」のほずであり、彼らにいったい何ができるというのか。礼拝者たちがなしていたことは、ペルーのリマに集まった人々に関する限り、たまたま「主イエス・キリストの母」となり「天の女王」となっただけでしかない、従順でおとなしい小柄なユダヤ人少女マリヤの祈りの歌を歌っていただけのことであった。

2 エルネスト・カルデナルの『ソレンチナーメの福音書』は、福音書の記事についてニカラグアのソレンチナーメにある漁村の人々が討論したことをまとめたものであるが、マリヤの歌を討論した際に次のようなやりとりが交わされている。

カルデナル——「民衆の中の一人の女性が『神は権力ある者を引きおろし、卑しい者を引き

上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹で帰らせられる』と歌ったことをヘロデが知ったとすれば、彼は何と言ったと思いますか。

ナターリア——（笑いながら）「あの女は頭がおかしくなったんだって言うわ」。

ロジータ——「あの女は共産主義者だって言うわよ」。

(Vol. 1, pp. 30-31)

あなた方はマリヤについてどのように言うだろうか。ナターリア、あるいはロジータ、それとも両方に同意するのだろうか。また、さらにもっと挑発的なラウレアーノの意見については、どのように対処するのだろうか。

ラウレアーノ——「問題点は、マリヤが共産主義者だと、彼らがきつと言うだろうってことじゃない。彼女は共産主義者だったんだ」(p. 31)。

3 教会指導者に対して大きな迫害が行なわれてきている南アメリカのある国では、多数の司祭が貧しい人々と運命を共にし、大都市のスラム地域に住んでいる。食べ物と寝場所を得るためのあらゆる仕事（街路の清掃、ペンキ塗り）をしながら、形式ばらない日曜「礼拝」を行なって、人々はその週の出来事について話し合い、司祭はそれらの出来事を適切な聖書記事に関連つけて

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

語るのである。そのようなやりとりの一つは以下のように進行した。

司祭——今日は九月一二日です。この日付はあなた方にとって何か特別なことを意味していませんか。

応答——三年前の昨日、チリではアジェンデが殺され、チリ人は指導者を失いました。現在彼らは抑圧を受けて苦しんでいます。

応答——アジェンデの死はマーティン・ルーサー・キングの死を思い出させます。

司祭——どうしてあなた方は二人の死と一緒に考えるんですか。

応答——なぜかって言うと、二人とも抑圧されている人々のことに関心を持っていたからです。

司祭——今日の日はあなた方にとって死だけしか意味していませんか。

応答——えーと、今日は聖マリヤ祭の日でもあるので、マリヤのことも考えます。

司祭——アジェンデとマーティン・ルーサー・キングとマリヤの間には何か関連することがありますか。

応答——それは、マリヤも抑圧されている人々に関心があったかどうかにかかっていると思

います。

司祭——ルカによる福音書の最初にあるマリヤの歌「マグニフィカート」の一部を読んでみましょう。「神は心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えていた者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」。

応答——ブラボー！ しかし神父さん、今のは俺たちが大聖堂で聞いているマリヤのようには全然聞こえてきません。それに、「聖画」のマリヤはそんな話し方をする人のように、はまるで見えないんですが。

司祭——「聖画」の中のマリヤについて話してみてください。

応答——（絵を見せながら）ここにマリヤがいて、三日月の上に立っています。彼女は冠をかぶり、指輪をはめ、金で刺繍した青いガウンを着ています。

司祭——確かに、マリヤの歌のマリヤとは違っている感じがします。あなた方はその絵はマリヤの歌に反していると思いますか。

応答——神は「卑しいものを引き上げ」られると言ったマリヤは、自分が月の上に立てるようになるために、仲間を置き去りにしたりすることはなかったでしょう。

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

一同の応答——マリヤを月から引き降ろそう。

応答——神は「権力ある者を王座から引きおろ」されると言つたマリヤは、冠をかぶったりすることはしなかつたでしょう。

一同の応答——冠をぬがせよう。

応答——神は「富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」と言つたマリヤは、自分の指に指輪をはめたりすることはしなかつたでしょう。

一同の応答——指輪をはずそう。

応答——神は「飢えている者を良いもので飽かせ」られると言つたマリヤは、金で刺繡した絹のガウンを着るために飢えている人々を見捨てたりすることはしなかつたでしょう。

一同の応答——ガウンをぬがそう。

困惑の応答——だけど神父さん、これは正しいことじゃない。(困つた様子で) 俺たちは処女マリヤを裸にしているだけだ。

司祭——よろしい。もしあなた方がこの絵の中のマリヤの外見が好きでないとしたら、マリヤの歌のマリヤはどのような外見だと思いますか。

応答——マリヤの歌のマリヤは、月の上に立っていたりせず、私たちが立っている土とはこ

りの上に立っているでしょう。

応答——マリヤの歌のマリヤは、冠をかぶっていたりせず、俺たちと同じように古い帽子をかぶって、太陽で目がくらくらないようにしているでしょう。

応答——マリヤの歌のマリヤは、宝石の指輪をはめていたりしないでしょう。彼女は私たちと同じようにごつごつした手をしているでしょう。

応答——マリヤの歌のマリヤは金で刺繍した絹のガウンを着ていたりせず、私たちと同じように、古着を着ているでしょう。

当惑の応答——神父さん、こんなこと言うのはひどいことかも知れませんが、マリヤはちょうど私たちと同じ外見をしているような感じがします。私の足は汚れていて、帽子は古く、手は荒れ、着ているものはボロボロになっています。

司祭——あなた方がひどい言い方をしているとは思いません。あなた方が描いたマリヤ像はすべて、大聖堂の中で聞いたり、あらゆる聖画の中で見たりするマリヤよりも、もっと聖書のマリヤのようだと私は思います。

応答——マリヤはスラムで私たちと一緒にここにいる方が、大聖堂の中や將軍の邸宅にいるよりはもっとびつたりすると思います。

5. マリヤの歌——誰のことを聞きとるのか

応答——マリヤが伝えていることは、あの人たちよりも私たちに對してもっと希望を与えてくれます。あの人たちには権力と金がありますが、マリヤは彼らに向かつて「神は権力ある者を王座から引きおろし、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」と告げているんです。

応答——そして私たちは社会の底辺にいてとても飢えていますが、マリヤは私たちに「神は卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ」られると告げて下さっています。

司祭——さてそれでは神がこのようなことをもたらしてくるためには、私たちはどのような手助けを始めることができるのでしょうか。